

イエスは群衆に注意をうながし(マルコ 7:14)、「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである(7:15)」と語った。

権威ぶったファリサイ人や律法学者のケガレ観(7:3~4)を激しく批判した(7:6~13)後の、真実に斬り込んだ言葉である。

イエスが批判したのは「こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている(7:13)」ことに関して。

食事の際に弟子が手を洗わない(7:2,5)という難癖に応じてのことだが、その批判は激烈で、彼らの拠り所である預言書(7:6~7)やモーセ律法を引いて(7:10~12)、「君たちの信仰は形だけだ」と三回もくり返した(7:8,9,13)。

律法学者らは「神の掟」を、その根本精神ではなく、文字面の、外側の、形式に墮落させていると。

御心が文字面になると、実体の外側になり、それに「応えているか否か」という基準は量り得る。つまり神の掟は人間の所有になってしまう。そうではなく内側の、量り得ない「心」が重要なのだと。

ところがイエスは、「内外」をさらにひっくり返す。外からのものは害を及ぼさないが「人の中から出て来るものが、人を汚す(7:15)」。

律法学者らの「外側」の信仰を批判しながら、その外側は害を為さない、と。逆にまた、量り得ない「内側」の信仰を重視しながら、その内側の罪性を告発している。これはどういうことであろうか。

内側と外側がひっくり返されている人間の姿を、どうイメージするだろうか。律法学者らにとっての外側は、群衆(7:14)にとっての内側なのであるだろうか。

教えを受けた群衆(7:14)にとっての外側とは、自然な、人間の生理(7:19)。これは努力や勤勉の如何に係わらず清められる(7:19)。

内側である人間の中から出て来るものは(7:15)、「みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など(7:21~22)」であると。

それでは、汚い内側よりも、外側の無垢な自然性をめざすのか。否、私たちが、努力や、勤勉さや、道徳といった量り得る外側で神の御機嫌を取ろうとすると、律法学者らのように「人間の言い伝えを固く守る(7:8)」姿勢になってしまう。神の恵みではなく、人間の自力に依り頼むことになるのだ。私たちは「人を汚すものが出て来る人の中(7:15)」において、恵みを受けるより他ない。

「すべての悪が出て来る中(7:23)」において罪を覚え、その汚れた私のまま神の御前に立つより他ないのだ。

「どのような人が主の山に上り、聖所に立つことができるのか(詩編 24:3)」。「それは潔白な手と清い心を持つ人(24:4)」。

「サウイフモノニワタシハナリタイ(賢治)」が、「人を汚すものがある(マルコ 7:15)」私にはちと無理か。「それは主を求める人、ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人(詩編 24:6)」。おっ、これならどうか。

不正と罪の中にいながら、神には「祝福してくださるまでは離しません(創世 32:27)」と率直にぶつかり得る「ヤコブ」の神なら、その御前に立つことができる。主の御顔を尋ね求めよう。

私たちは、「悪い思いが出て来る心(マルコ 7:21)」のまま神の御前に立つ。いやすでに、イエスの前に立っている(7:14)。体裁を繕った外側を手放し、今、誰の前に立っているかを、はっきり自覚したい。



#### 《おまけのひとこと》

誰の前に私は立っているのか 面接官の前ではない 手柄を競い合うような仲間たちの前ではない  
私と共に生き 私の本音よりも 私の無意識よりも 私を知っておられる方の前に立っているのだ